

歴史の中の女たち

<第 13 回>

アニータ・ガリバルディ
—二つの世界の英雄の妻—

伊藤 滋子



アニータ・リベイロはブラジル南部の町ラグナの近くに生まれた。リベイロ家は大西洋の島アソーレスから移住してきた家系で、父親は牧畜業を営んでいた。小さい時から聡明で活発な少女であったが、父親と3人の姉妹が相次いで亡くなり、心細くなった母親のたつての願いで15才の時にラグナの靴屋に嫁いだ。しかし夫は飲んだくれで、結婚して3年になるというのに子供もなく、この当時はブラジル王国軍に従軍して不在であった。

1839年のその日も彼女はひとり海岸に出て、数週間前から沖合に停泊する3隻の船を眺めていた。ブラジル国王に反旗を翻した反

乱軍の船だということであったが、一門づつ備え付けられた大砲で、かろうじて戦艦だとわかる程度の船であった。巷では王党派だ、いや共和国派だとかまびすしいことであったが、その実体が分かって議論しているものなどいない。一方、船から望遠鏡でラグナの町を眺めていたこの小船団の指揮官ジウセッペ・ガリバルディは海辺にたたずむアニータの姿を見たとき、彼女の虜となってしまった。18才のアニータは長い黒髪に豊かな胸、小麦色の肌をした背の高い女丈夫である。ガリバルディは上陸して彼女を探し出すと、「君は僕のものになるべきだ」といい、数日のうちに船と一緒に暮らし始めた。

ガリバルディはこの時32才、ニースに生まれ、15才でやはり船乗りであった父の薫陶を受けて船乗りとなり、地中海、エーゲ海、黒海、カナリア諸島などを縦横無尽に航海してきた。その間嵐に遭い九死に一生を得たり、あるいは海賊に襲われるといった経験は数えきれないほどあり、軍人ではないが、胆は据わっている。当時イタリアはいくつもの王国、大公国、教皇国などに分断され、フランス革命の影響を受けて騒然とした政治情勢にあった。彼はフランスから追放されるサン・シモン主義者（社会主義の一派）を自分の船で運んだことからその革新的な思想の洗礼をうけ、また、政治的理由で国外に亡命しているイタリア人を通じて、イタリアの統

一、自由、独立を目指すリソルジメント運動を知り、深い共鳴をおぼえた。そしてジェノバでリソルジメント運動を推進する結社『青年イタリア』の蜂起に加わろうとする。企ては不発に終わったが、ガリバルディは 1834 年、欠席裁判で死刑を宣告され、偽のパスポートでマルセーユにしばらく居たあと、翌年リオ・デ・ジャネイロに亡命してきた。リオでは南北アメリカ諸国の解放と縁の深い秘密結社フリー・メイソンに入会する。

その頃ブラジル国内でも、南部のリオ・グランデで共和制、自由主義、奴隷廃止を目ざすファロピーリャ（ボロ布）の反乱が起こっていた。この反乱は当初はブラジル王国からの分離をめざすものではなかったが、ウルグアイの独立に刺激され、次第に独立した共和国を打ち立てようとする方向に傾いて行き、1836 年、ベント・ゴンザレス・ダ・シルヴァを大統領に、『リオ・グランデ・ド・スル共和国』の樹立を宣言した。その動きは他の地方にも波及し、1837 年バイア、1842 年サンパウロと、自由主義革命が企てられる。ゴンザレス大統領の参謀のなかにイタリア人亡命者がいて、革命、という言葉を知ると血が騒ぐガリバルディは彼らを通じて反乱軍に協力するようになった。そして 1839 年、ラグナ進攻に際して海上からの攻撃の指揮をとり、その占拠に成功した。彼はゴンザレスの姪に恋していたのだが、明るく優雅で教養のあるその女性はいかにも身分違いの高嶺の花だとわかり、諦める決心をしたばかりだ。アニータとの出会はその傷跡を癒してくれるはずだった。

1839 年 7 月 29 日、ラグナを占拠した反乱軍は『ジュリアナ共和国』の樹立を宣言した。しかしこの共和国は短命に終わる。11 月には 13 隻の大型船に最新の武器とよく訓練された 3000 人の兵士を乗せた王国軍がリ

オ・デ・ジャネイロから攻めてきた。敵の船団が近づいてくるのを見たガリバルディはアニータに陸に避難するように言いつけて、大急ぎで戦いの準備に取り掛かった。しかし戦闘が始まると、物陰に隠れていた彼女は弾が行き交う中をびくともせず、銃に弾を込めるのを手伝い、兵士を力づけ、兵士が倒れると自分でもその銃を取って戦った。ガリバルディは彼女の毅然とした態度と機敏な動作に目を見張る。だが圧倒的な力の差はいかんともし難く、彼はついに 3 隻の船に火を放ち、残った者を率いてラグナから退却し、陸路リオ・グランデ・ド・スルを目指す。勿論アニータも一緒だ。彼女はかろうじて自分の名前が書ける程度の教育しか受けていない。しかし王政、植民地制度などの古い体制を破壊し、共和国を樹立する戦いの重要性は確実に理解していた。

追撃してくる敵との戦いに明け暮れる日々の中でアニータはいやが上にも兵士らしくなっていくが、ある日馬を撃たれて落馬し、敵に捕らえられてしまった。大勢の仲間が殺され、敵は彼女にガリバルディは戦場で死んだと告げたが、彼女は許しを得て 60 人の戦死者のなかからガリバルディを探すが見つからず、彼が生きていると確信する。この時彼女は妊娠しており、生まれてくる子供をどうしても父親に抱かせてやらなければと必死で、隙をみて敵の軍服と馬を盗んで逃亡した。敵は追いかけてきたが、彼女は激流に飛び込み、馬の尻尾につかまって向こう岸に渡り、ようやく追跡を振り切った。それからも飢えや渇きと戦い、通りがかりの人に助けられながら、幾日も森をさまよい、ようやくガリバルディと合流することができた。数ヶ月後アニータは長男を出産し、彼はイタリアのリソルジメント運動の殉教者の名を取ってメノッティと名づけた。持ち合わせていた一枚

のスカーフが初着となった。出産後まもなく、ガリバルディが食料を探しに出かけて留守の間に敵に見つかり、アニータは赤ん坊を鞍の前にくくりつけて逃げおおす。逃避行は5ヶ月に及んだが、南下するにつれ危険は去り、次第に牧歌的な旅に変わってゆく。途中で小屋を建て、野生馬を調教し、ブラジル最大の湖、ラグナ・デ・パトスを渡る時には木を切り出してカヌーを作った。アニータは素晴らしい順応力を発揮し、この野生的な生活を結構楽しんだくらいだった。

リオ・グランデに着いたガリバルディはゴンザレス大統領に恩赦を求め、ファロピーリャの反乱から身を引き、ウルグアイのモンテビデオに移ることにする。子供も生まれた今、落ち着いた家庭生活が必要と考えたのだ。共和国政府からこれまでの働きに対する恩賞として900頭の牛を贈られるが、にわか仕立てのガウチョ（牧童）にとって、原野で牛を集め、その群れを移動させる作業は非常に困難で、1ヶ月後モンテビデオに着いた時には牛はあらかた失くし、わずかな皮しか残っていなかった。それを元手に小さな商売を始めるが、物欲のない彼に商売は無理でたちまち行き詰まり、友人の助けで、深く学んだこともない数学や歴史の教師となってつましく生計をたてた。しかし翌1842年、ウルグアイとアルゼンティンのロサスとの間で戦いが始まると、彼は傍観者ではいられない。コリエンテスとサンタ・フェの2州がロサスの牛耳るアルゼンティンに反旗をひるがえたため、ウルグアイ政府は2州を支援して自国に併合しようと、ガリバルディを派遣した。彼は3隻の船でウルグアイ河を遡るが、戦いに敗れて船を焼き、ほうほうの体でモンテビデオに逃げ帰る。しかしこの時、ゲリラ戦のやり方など多くを学び、将来のための貴重な経験となった。

この戦争でモンテビデオはアルゼンティン軍に封鎖され、ガリバルディはイタリア人義勇兵部隊を編成して抗戦に参加する。ちょうど戦争のあおりで皮革の輸出が止まり、ブエノスアイレスの屠畜場で働く作業員用の赤い布が余っていたのを安く購入し、アニータはそれを使ってイタリア人義勇兵のために丈の長いシャツを作った。以来赤シャツはガリバルディの代名詞となり、世界中で革命の色として使われるようになる。ガリバルディの率いるイタリア軍は数こそ少なかったが、小船で幾度となくアルゼンティンの艦隊に捨て身の攻撃を挑み、敵将ブラウン提督を感嘆させ、一躍勇名をとどろかせた。しかも、ウルグアイ政府は報奨として土地と牛馬を贈ろうとするが、彼は「ウルグアイの人々と労働と危険を分かち合えるという栄誉だけで十分」とそれを断るのだった。たった1枚のシャツを毎日洗濯して着るほどに困窮しながら、この私利私欲にとらわれず野心のないところが、彼がその後国民的英雄になり得た最大の理由であった。ブラウン提督はイギリスに帰国する時、まだ戦争が終る前であったが、特別に許可を得てモンテビデオにガリバルディを表敬訪問し、敵をたたえた。

アニータとガリバルディはモンテビデオに來た翌年正式に結婚し、その後次々に3人の子供に恵まれた。ジフテリアで長女ロシータを亡くした時のガリバルディの悲しみようはたとえ様もなく、ウルグアイを去る時には禁を犯して棺を掘り起こし一緒に運んでいったくらいだ。しかしその一方では、美しい女とみれば声をかけるのが礼儀ぐらいに思っている典型的なラテン男で、しかも英雄としてもてはやされているのだから、女たちが放っておかない。アニータが浮気の現場にピストルをもって乗りこむといった場面もあったが、彼は家族を愛し、アニータは部屋が2

つしかない家でロウソクを買う金にも事欠くような生活に甘んじて、夫が留守がちの家庭を守り、戦病者の看護にもつくした。

ガリバルディの活躍は大々的にヨーロッパに伝えられ、イタリアにおける彼の人気はいやが上にも高まり、リソルジメント運動を大いに勇気づけた。丁度その頃自由主義者との評判の高いピオ9世がローマ教皇に就任したこともあって、統一への期待は膨らむ一方で、帰還してリソルジメント運動を指揮してほしいという要請がピエモンテ王国から届く。父はすでに亡くなっていたが、母は健在で、彼も望郷の念断ち難く、また6年を過ごしたウルグアイの政治情勢の中でも、そろそろ所詮よそ者と感じ始めているところであった。1847年アニータは準備を整えるために、3人の子供を連れて一足先にイタリアへ発ち、彼はその翌年、募金を集めてようやく購入できた船で63人の同志とともに出発した。その中にはイタリア人だけではなく、ウルグアイ人ガウチョやブラジル王軍の船を襲ったとき解放した黒人奴隷アギアールなどがいた。ガリバルディにとっては14年ぶりに踏む故郷の土であった。

1848年、帰国したガリバルディはニースで母やアニータ、子供たちと束の間の再会を果たしたあと、イタリア各地で義勇兵部隊を率いて戦うが、イタリア統一の機はまだ熟しておらず、敵のオーストリア軍、フランス軍は余りにも強力であった。1849年、革命派は教皇ピオ9世が逃げだしたあとのローマを一時的に占拠するが、教皇のローマ奪回の呼びかけに応じてやってきたフランス軍の猛攻撃を受け、ガリバルディ軍の中核をなす兵士500人のほとんどを失った。その中にはアギアールを始めモンテビデオからついてきた者たちも多く含まれていた。フランス軍のローマ包囲はそのあと1ヶ月続く。

アニータがひとりで敗色濃いローマにやってたのは、包囲がこれ以上持ちこたえられないという時だった。彼女の姿をみたガリバルディは驚く。妊娠5ヶ月で、病氣と疲労でやつれ、かつての勇ましい女丈夫の面影はどこにもなかった。一週間後、激しい砲撃で防衛軍2千人、フランス軍千人の戦死者を出しローマは陥落する。ガリバルディは生き残った兵を率いて唯一まだ共和派が抵抗を続けているヴェネチアへ退却しようとした。その後を追うのはオーストリア軍だった。中立を守るサン・マリノ共和国まで来た時、その執政官はガリバルディに衰弱の激しいアニータを置いていくように勧めるが、彼女は承知せず、ガリバルディは彼女を抱えて逃避行を続けた。だがラベンナまで来た時、アニータはとうとう力尽き、夫の腕の中で息を引き取る。27才であった。オーストリア軍はすぐ背後に迫り遺体を埋葬するひまもなく、かろうじて砂をかけただけだった。以来砂から突き出た腕がアニータのシンボルとなる。正式に埋葬できたのは10年後のことであった。

ガリバルディはその後家族とは会えないまま強制的にニューヨークへ追放され、船長として中米、ペルー、広東、オーストラリアなどを航海して働き、5年後イタリアに戻ってふたたび独立戦争に身を投じる。1860年には赤シャツの千人隊を率いてシチリア、ナポリを解放した壮挙で世の注目を浴びた。その翌年イタリアはピエモンテ王の元に王国として統一されるが、彼の波乱に満ちた活躍はまだまだ終わらない。有名になるにつれ、私生活の面でも多くの女性に取り巻かれる華やかな女性遍歴が続きその後2度結婚した。地中海に浮ぶ小島カプレラ島を買い、晩年はそこで隠遁生活を送り、死後はアニータと長女ロシータと共に島の中に葬られた。

(いとう・しげこ)